

魚の嫌いな猫

私が小学生の頃の思い出である。私の実家は、入り口を入った所に炉端があり薪を焚いて、暖を取ったり、食べ物の煮炊きをしたり、魚等を焼く。火の周りは危なくないよう、三方が七、八十センチの鉄製の柵がある。

家族全員が炉端の周りに腰掛けられる様になっている。此処が家族の憩いの場、お客さんが来たときは応接間になる。又柵の上に大きな板を載せて食卓に早変わり、お客にお茶を出すテーブルにもなる。

真ん中の焚き火は大きな炭火になり、ストーブになる。今考えると合理的であった様な気がする。

木の焚き口の反対側は「ヨコザ」と云ってその家の旦那が座る特別な場所である。父文一郎は長い煙管（キセル）に刻みタバコを詰め、炉端の火で点火する。囲炉裏端には飼い猫が気持ちよさそうに寝転んでいる。

母が魚を焼き始めると、我が家の猫は、むっくり起きあがり逃げ出す。何処の家の猫も隙を見て魚を食わえて逃げ回らずである。しかし我が家の猫は違う、焼き始めただけで、魚に見向きもせずに退散する。

父は魚を焼き始めると、長い煙管で寝ている猫の頭を、ゴツン、と強く叩く。気持ちよく寝ているのに、魚の匂いがすると同時に猫は頭を打たれるから、タマツタものではない。必ずやられるから、猫は先手を打って逃げ出すと云う訳である。

私は実際その場に居たことがない。兄達がよく云っていた事であるが、真偽の程は分らない。作り話だったかもしれない。